

壁際の大きな置き時計が十二時の鐘を鳴らし、秘書官用の机についていた大井は書類仕事の手を休めて伸びをする。

窓から差し込む陽差しに、大井が延ばした左手の薬指にはめられたケツコンの証の指輪が輝く。

「大井つち、休憩しよつか？」

提督の執務机には本来の主ではなく大井の親友にして同型艦の相棒、北上が座っている。机にだらしなく身体を預けた北上が腕を伸ばしてぶらぶらさせると、大井と同じく左手の薬指にはめられたケツコン指輪が輝きを放つ。

大井と北上はこの鎮守府で最初の——そして、今のところ二隻だけのケツコン艦だった。

「もうちょつとだけ進めたら、食堂に行きましょうか」

「そんな遅くなったらご飯なくなっちゃうよ？」

「そしたら私がか作つてあげますから」

軽口を叩きながら大井はてきばぎと事務処理を進めていく。練習艦、すなわち艦娘の運用方法を確立するために最初の秘書艦よりも先に着任している大井は、結果的にこの鎮守府で最も長い経験を誇る艦娘だった。

再び仕事に戻った大井をよそに、北上は提督の机に座ったまま何もせずだらけた姿をさらしている。それを目に留めながらも大井は何も言わない。

ああ見えてこちらが本当に困ったときには目ざとく気が付いて助けてくれるのが北上だ。何より気の置けない会話が出来る

相手と一緒に居てくれるのは、ひとりきりで仕事するよりもずっと気楽だった。

公私混同と見られるのにも構わず、大井はこの方がやりやすいからと提督不在の事務仕事の時にはいつも北上を執務室に呼んでいた。どのみち他の艦娘が秘書艦をするときにも姉妹や仲の良い艦娘が執務室に入り浸るのはよくあることだ。いままら大井と北上と一緒に居たところで、誰が何を言うでもなかった。

人が増えればそこに組織が生まれる。組織が生まれれば、それを管理する者が必要になる。人でなく艦娘でも、それは同じことだ。

つまるところ秘書艦の業務とは、鎮守府にあふれる艦娘たちの管理、ただそれに尽きる。提督の右腕として艦隊の鎮守府の統率に腕をふるうことのみを期待して秘書艦に就いた艦娘たちが決まって失望するのはここだった。

「いやーほんと、駆逐艦はつかり増えるねー うざいつたらありゃしない」

愚痴る北上にうなずきを返しながら書類をめくる。手元にあるのは新しくやってきた駆逐艦娘たちの身上調査書だ。

MI作戦と渾作戦を終えたこの鎮守府には沢山の艦娘たち——そのほとんどは駆逐艦だ——がやってきていた。一人を新しく受け入れるだけでも大変なのに、合計で十人弱も増えたのだから大井は彼女たちを受け入れるのに大わらわだった。